

緒論 国語史序説

人類のコトバ、鳥獣のコトバと並べていうことがあるけれど、鳥獣のコトバは、実は「言語」以前の音声表出であり、人間ならば感声というものすなわち、喜怒哀楽の「声」にすぎないところのものである。だから、やはりあれは鳴き声であって、ただ人間の音声言語に類推してたとえに鳥獣のコトバと呼ぶまでである。

それゆえに鳥獣のコトバは、まったくかれらの自然声であって、ひとりで覚えてあのようにそれぞれが鳴くのである。

人類言語はそうではなく、生れ落ちてから周囲の人々の話すのを経験して成長をする間に一語一語、まねをして、まなんで、まなび覚えて片言時代を経て、一人前になって、はじめて一人前に話すようになる。

だから、人類言語は、自然的存在ではなくして、伝承によって存在する、伝承的言語である。

伝承的言語の特質は、変遷をすることである。自然的にあるのではなく、一に伝承しだいで、伝承に規定されるからである。

われわれが、「人」を「ひと」と言うのは、そういうことが自然だからではなく、またいちばん適切だからでもなく——何がいちばん適切だかわれわれにわかることではない——単に、生れ落ちた社

会の周囲が「ひと」とそれを言っているのを聞いて育つから、つい、そう言って成長するまでである。すべての単語みなそうである。文法もそうである。

だから、もし、周囲が「人」をマンと言っている所に生れるなら、われわれもマンと覚えてそう言う。メンシュという所に生れるなら、メンシュという、ホモという所に育ったらホモと覚えてしまうであろう。「人」は決して「ひと」に限るのではなく、単に伝承によってたまたまそうわれわれが言うのにほかならない。

いわば、単語は一々ただそのものの符号にすぎない。符号は、ただ外的にそのものへ結びついていて、別段、内的の関係が結びついていないことを要しない。だから、方言によっては、ヒトがフィットとも言われ、フトとも言われ、ピトとも言われている。原始日本語では、ピトだったはずであり、奈良時代・平安時代・中世時代にかけては、フィットだった。だから、今でも、最も古色を伝えている琉球語の最南端の宮古島・八重山島でピトと言うのであり、また、今なお中世のおもかげを残していることの多い奥州や出雲や、沖繩本島はフィットと言っているのである。中部方言はヒトとなったが、これは江戸時代以降の変化なのである。

言語というものは、このように、時代から時代へ、変化をするのが常である。それは、大川の流れの、流れるとも見えないようで、昼夜をおかず流れているように、時代から時代へ、ゆうゆうとして、間断なく、やまず流動しているのが、人類言語のほんとうのあり方

である。

鳥獣の鳴き声には、古今の差もないのに、言語には、どここの言語にも、上代語・古代語・中世語・近代語・現代語があるゆえんである。

言語のこの変化ばかりは、どんな権力をもってしてもささえることはできない。どんな法律を設けても、これをさし止めることはできない。知らないうちに変わっているのであるから。

変化は、人類言語の本性であり、宿命である。言語の発達も進化も、すべては変化の内にあるのであって、変化をよそにしては言語に進化も発達もない。

もしも言語に変化を否定したら、言語は死んでしまう。というのは、言語の生命に目を閉じ、言語の全歴史を見ずにしまうことである。

この変化を、大きく肯定することによってのみ、生々発展するわれわれの言語の真生命がはつらつとしてその真相をわれわれの眼前に展開するのみである。

いつ、どここの言語でも、完成したものはなく、言語は、すべて生々発展の途上にあるものである。

言語ないし国語の問題を処理し、もしくは考量するときには、まずこの事をはっきりと意識してなされなければならない。これを忘れては、大事な判断を誤る恐れがあるからである。

実は、われわれの弱さ、どうかすると、日常のことに心が慣れて、

この見やすき事実を見忘れ、知らず知らず言語の「変化」を否定する誤りに陥ることがある。

それは何か。

たとえば、こういうときがそれである。蝶々は「てふてふ」で、昨日・今日は「きのふ・けふ」である、そのみが永久に真実で、今これをチョウチョウと書いたり、キノウ・キョウと書いたりすることはあるべからざることだと思ふ類がこれである。

こういう思いをすることは、決して少なしとしない。なぜだろう。どこからこういう気持が養われているのであろう。驚くべき「変化の否定」である。

この気持は、無意識に、言語というものを、すでにできあがったものとして、不断に変化するものだったことを、うっかり見のがした気持なのである。

こういう気持を養うのは、常に、言語の実習時間、すなわち学校の教室内におけるふんい気である。なぜなら、すべて言語の実習——国語・漢文や英語の時間にはしばらく言語をば、できあがったもののように取り扱って、教えもし、習いもするからである。

言語の実習には、そう取り扱うことは必要なことである。もしも、言語が、ふらふらしていて、動いていては捕えようがなく、「こうだ」と教えようがないからである。だから、実習の時間には、しばらく言語をすでにできあがったものとして教えるよりしかたがない。

そこまではやむをえない、むしろ、最も必要なことでさえある。大事なことは、それに慣れて、実習以外のときにもそういう気持ちから抜け切れないことではしかたがないということである。そこは人間の弱さである。「てふてふ」「きのふ・けふ」を未来永劫の真理と思ひ込むのは、実習時間の教室気分の延長以外の何物でもない。

国家百年の大計を建てようとするようなときには、この教室で養われた気分を超越して言語そのものの本質を、高所・大所から見わたして考えきわめなければならない。そういう見方を学ぶには、国語の歴史的認識を深めることがいちばんである。

上代国語の音韻と真名

最近の国語学の最大の発見、現代国語学がそれによって一新時期を画すといわれるものは、橋本進吉博士の上代国語におけるいわゆる13の特殊かなづかいの発見である。

これによれば、奈良時代の音韻は、50音どころではなく、濁音を別にしても62音ほどになろうとする。すなわち、キヒミケヘメコソトノモヨロの13には、おのおのに甲乙2類の書き分けが記紀万葉に存することで、これは、音の相違に基く。しかも、子音の差ではなくして、母音の差だというのである。たとえばイ列に、-iと-iとを分ち、エ列に-eと-ëとを分ち、オ列に-oと-öとを分

つ類である。-i -e -o を甲類と呼び -i -ë -ö を乙類と呼ぶ。この乙類の実際の音価については、今日のところ、だいたい中舌音か、もしくはウムラウトのような混合母音とあたりがつけられる。

それで、キの2類についていえば、咲き・行き・置き（四段活のキ）、着（一段活のキ）・雪・来・衣きぬのきは甲類のキ ki であり、起き・尽よき・避よき（上二段のキ）、月・木・城等のきは乙類のキ kī である。甲類のキは、き祁・き吉・き棄・き枳・き企・き支等で書かれ、乙類のキは、き紀・き記・き奇・き幾・き貴・き氣等で書かれる。

同様に、ケの2類も、甲類のケ ke はけ祁・計・奚・鷄・溪等で書かれる四段活の命令形、咲け・行け・置けのけ、また存在態の咲けり・行けり・置けりのけ、等であって、乙類のケ kē は、け氣・け既・け階・け戒・け開で書かれる四段活已然形の咲けば・行けば・置けばの類のけ、下二段活、ま設け・解け・避けのけ、酒・竹・嶽・菅のけの類がこれであった。

コの2類の甲類 ko は、古・固・故・枯・姑・顧・孤の類で書かれる子・彦・小・籠かこ・水手かのこ・男をこ・男子をこの類のこ、乙類 kö は、許・居・巨・己・挙・渠・虚の類で書かれるこ此こ處・こ事・こ言・こ琴・こ心・こ所・こ床・こ常・こ木の類のこである。

なお、イ列のヒミについていえば――

まずヒの2類についても、甲類（比・辟・譬・卑・毘・鼻）は、やはり四段活の連用形、思^{たま}ひ・賜^{たま}ひ・喜^{たま}ひ等々のひ（び）、人^{ひめ}・姫^{ひめ}・日等のひの類、乙類（斐・肥・備）は、やはり上二段活の恋^{ひめ}ひ・忍^{ひめ}び等のひ（び）、火^ひ・干^ひ・甲^か斐^ひ・肥前^ひ・肥後^ひのひ、備前^{びんご}・備後^{きび}・吉^き備^びのびの類がそれである。

また、ミの2類についても、甲類（美・弥・御）はやはり四段活連用形、読^くみ・汲^くみのみ、君^{かみ}・上^{かみ}のみがそれであり、乙類（微・未・身）は、また上二段の恨^みみ・妻^こ籠^こみのみ、神^み・身^み・実^みのみの類がそれであった。

甲類のキヒミは、音便を起すけれども、乙類のキヒミには音便がない。そして、乙類のキヒミには母音交替の法則があつて、月^{つき}一月^{つき}、木^き一木^こ、火^ひ一火^ほ、身^み一胸^{むね}（身根）のような変化が名詞・動詞・形容詞に通じてあつた。（有坂秀世博士「国語音韻史の研究」）

同様に、その他のヘメソトノヨモロにも、それぞれ甲乙2類があつて、語によって厳密に書き分けられていたこと、古事記・日本書紀・万葉集に通じての一致であつた。（もっとも、モは古事記にだけはっきり2類があり、日本書紀・万葉集には、混同が起つていた）。しかし、これは大和地方の言語の上のことであつて、地方の方言には、相当の混用が始まっていた。

上代音韻図

奈良時代を仮想す

| | | | | | | |
|---|----------|-------|----------------|-------|----------------|----------------|
| ア | 行 | 阿 a | 伊 i | 宇 u | 衣 e | 於 o |
| カ | 行 | 加 ka | 伎 ki 紀 ki | 久 ku | 計 ke 氣 ke | 古 ko 許 kö |
| ガ | 語頭 | 賀 ga | 岐 gi 宜 gi | 具 gu | 下 ge 碍 gö | 呉 go 期 gö |
| | 語中 語尾 | 賀 nga | 岐 ngi 宜 ngi | 具 ngu | 中 nge 碍 nge | 呉 ngo 期 ngö |
| サ | 行 | 佐 ca | 之 ci | 須 cu | 世 ce | 蘇 co 曾 cö |
| ザ | 行 | 邪 ja | 士 ji | 受 ju | 是 je | 俗 jo 叙 jö |
| タ | 行 | 多 ta | 知 ti | 都 tu | 天 te | 斗 to 登 tö |
| ダ | 語頭 | 陀 da | 尼 di | 豆 du | 提 de | 度 do 杼 dö |
| | 語中 語尾 | 陀 nda | 尼 ndi | 豆 ndu | 提 nde | 度 ndo 杼 ndö |
| ナ | 行 | 那 na | 尔 ni | 奴 nu | 弥 ne | 怒 no 能 nö |
| ハ | 行 | 波 fa | 比 fi 斐 fi | 不 fu | 幣 fe 閉 fe | 保 fo |
| バ | 語頭 | 婆 ba | 毘 bi 備 bi | 夫 bu | 辨 be 倍 be | 煩 bo |
| | 語中 語尾 | 婆 mba | 毘 mbi 備 mbi | 夫 mbu | 辨 mbe 倍 mbë | 煩 mbo |
| マ | 行 | 末 ma | 美 mi 微 mi | 牟 mu | 売 me 米 me | 毛 mo 母 mö |
| ヤ | 行 | 也 ya | | 由 yu | 江 ye | 用 yo 余 yö |
| ラ | 行 | 良 ra | 利 ri | 留 ru | 礼 re | 漏 ro 呂 rö |
| ワ | 行 | 和 wa | 為 wi | | 惠 we | 乎 wo |

注 cはtʃあるいはts, jはdʒあるいはdz.

古代国語の音韻とかな

大和^{ヤマト}から、都が山城に移って平安時代にはいると、13 の特殊かなづかいがたちまち異変に会ってしまう。その初頭には、まだ多少は2類の区別を存したが（たとえば仏足石の歌や古事談など）、中ごろからは、まったくその別がなくなってしまうから、平安時代の作であるかな文字は、濁音や拗音を除けば50音でじゅうぶん間に合うほどの発音に統一されてきたのである。

五十音図は、平安時代人の作であるが、これはだいたいその時代の口に合わせて作られたものではあるが、反切を一目にわかるために作られたものであって、必ずしもその時代の音節を数え合わせたものではない。それゆえ、ワ行のウ列とヤ行のイ列とは、実存したために設けられたものではなく、理論上ありうべきものであるために置かれただけにすぎない。なぜなら、この二つの区別は、奈良時代の真名にさえ、存しなかったものである上に、口に合わせて時代のことばを書こうとしてできたかな文字の数が、いろはの47字もしくはせいぜい48字にすぎなかったことからめいりょうである。

かな文字を学ぶ「手習^{てなひ}の詞」の最古のものと思われる、いわゆる
 天地^{あめつち}の詞は

あめ(天)つち(地)ほし(星)そら(空)やま(山)かは(川)みね(峯)
 たに(谷)くも(雲)きり(霧)むろ(室)こけ(苔)うへ(上)すゑ(末)
 ゆわ(硫黄)さる(猿)おふせよ, え(榎)のえ(枝)を, なれあて。

の 48 字であった。江の草体江と、衣の草体のえとで、ヤ行の ye とア行の e とを書き分けていたからである。すなわち、絶エ・消エ・越エ・冴エ・燃エ・煮エ等のエは ye であった。名詞では枝のエ、兄弟のエ、入江のエなどがそれであった。

これに対し、「得」の未然形および連用形のエはア行のエで、e であった。名詞では榎のエ、愛媛のエ、荏のエなどがそれだった。

この区別は、記・紀・万葉にはもちろん、平安にはいっても、靈異記や、仏足石の歌にはまだはっきり書き分けられている。平安初期の経卷のふりがなにも明らかに区別されていた。たとえば、大矢透「仮名字体沿革資料」参照。

それが、いつから 47 字になってきたか。平安時代、天地の詞の 48 字を頭に 48 首の歌を詠むことが、ちょっとはやった。

藤原有忠・源順・相模など。

相模は、ye と e とをちゃんと区別している。相模集に、48 首全部は載せていないが、載っている部分がちょうど、これを見るに間に合う部分である。すなわち、「榎の枝」の部が、次の歌になっている。

得こそ寝ね冬の夜深く寝覚めして冴えまさるかな袖の氷の
 枝寒み積れる雪の消えせねば冬と見るかな花のときはを

相模は少なくとも、得と枝との相違を詠み分けている。

しかるに、源順のは、すっかりこれを混じてこうなっている。

えも言はで恋のみ増る我が身かないづこや岩におふる松が枝

えもせかぬ涙の川のはてはてやしひて恋しき山はつくばえ

しかも順は、「藤原有忠は、歌の頭にのみ用いたが、自分は下にも同じ文字をすえる」と揚言して、48首は作っているけれど、41首目（ア行のエ）も、43首目（ヤ行のエ）も、「得こそ何々」という同一の語を平気で用いて、ア行とヤ行との差別を知っていなかったことをみずから暴露している。おまけに、下にも同じ文字をふませるといって、41首目は、頭がア行の得、下がヤ行の枝を用いて、このかなの異なることを気がつかない。当時一流の学者で、勤子内親王のために、倭名類聚鈔わみようるいじゆうしよを著わしているのに、この本にもやはり、ア行・ヤ行のエ列の区別が没了されているのを照し合わせて、平安の中ごろ、この区別が一般になくなってきていたことを知るのである。

だからこそ、紀貫之きのつらゆきの土佐日記も、あえてこれを書き分けない。いや、竹取物語も、源氏物語も、枕の草紙も、古今集もである。ましてそれ以下の日記や物語や歌集、みなである。いや、これらは、ひとり注とえとを書き分けなければかりではない。すでに区別のなくなった13の特殊かなづかいの2類の差などは、全然書き分けず、日常口にするそのことばを、ただ口に合わせて、かな書きに自由に書き流して行ったからこそ、国民文学の黄金時代を現出するほどか

な文学がだれにもだれにも書かれたのである。

もしこれを、前代の書き分けを守って、書きつけよと命ぜられるとしたら、一流の学者の源順さえ書くことができなかつたはずである。これがすなわち、時代による言語の変遷である。

平安時代も、源平時代までくると、またその上に発音の変化が起っていた。語の中や下にくるはひふへほが、ワ行と同じく wa, wi, u, we, wo と発音されてくる。たとえば、沢・川・顔・棹・塩・願ひ・思ひ・恋ひ等々がサワ・カワ・カラ・サヲ・シヲ・ネガキ・オモキの発音になったのである。前の母音の引き続きで、はひふへほが自然に有声化してきた現象である。

古代語音韻図

平安中期

| | | | | | |
|----------------|-------|-------|-------|-------|-------|
| ア行 | あ a | い i | う u | え e | お o |
| カ行 | か ka | き ki | く ku | け ke | こ ko |
| ガ行 語頭 | が ga | ぎ gi | ぐ gu | げ ge | ご go |
| ガ行 語中 語尾 | が nga | ぎ ngi | ぐ ngu | げ nge | ご ngo |
| サ行 | さ sa | し si | す su | せ se | そ so |
| ザ行 | ざ za | じ zi | ず zu | ぜ ze | ぞ zo |
| タ行 | た ta | ち ti | つ tu | て te | と to |
| ダ行 語頭 | だ da | ぢ di | づ du | で de | ど do |

| | | | | | | | |
|--------|----------|-------|-------|-------|-------|-------|--|
| ダ 行 | 語中 語尾 | だ nda | ぢ ndi | づ ndu | で nde | ど ndo | |
| ナ 行 | | な na | に ni | ぬ nu | ね ne | の no | |
| ハ 行 | 語頭 | は fa | ひ fi | ふ fu | へ fe | ほ fo | |
| ハ 行 | 語中 語尾 | は fa | ひ fi | ふ fu | へ fe | ほ fo | 末期に wa, wi, u, we, wo とな って語頭 と分化す。 |
| バ 行 | 語頭 | ば ba | び bi | ぶ bu | べ be | ぼ bo | |
| バ 行 | 語中 語尾 | ば mba | び mbi | ぶ mbu | べ mbe | ぼ mbo | |
| パ 行 | | ぱ pa | ぴ pi | ぷ pu | ぺ pe | ぽ po | |
| マ 行 | | ま ma | み mi | む mu | め me | も mo | |
| ヤ 行 | | や ya | | ゆ yu | 江 ye | よ yo | 中期に yeがe となる |
| ラ 行 | | ら ra | り ri | る ru | れ re | ろ ro | |
| ワ 行 | | わ wa | ゐ wi | | ゑ we | を wo | |

それで、この時代の歌では、もちゐ（用）をもちひ（餅）へ掛けたり、しゐ（四位）をしひ（椎）へ掛けたりするようになる。同音となったから、そう聞かせることができたからである。源三位よりまさ頼政が、平家の代で、同じに四位になった平家の公達が三位に登っても、源氏の自分がいつまでも四位に、ほったらかされていることを後白河法皇へ訴えるのに、

のぼるべきたつき無き身は木のもとにしひを拾ひて世をわたる

かな

と詠んで、その意味が通じたのが、しひとしゐが同音であったから
のことである。

掛け詞は、それまで同行の語の間でのみ行われていたのに、院政
時代から、それが乱れて、異なる行の間にも行われるようになった
と難ぜられるのは、このワ行・ハ行の間に掛けて行われることをさ
すのであった。難じるほうが無理で、発音の変遷があって、同音に
なった以上、同行と同じ効果をもつから、理解にいっとうさしつか
えがなく通用したことを認識すべきである。

中世国語と定家卿^{きよ}かなづかい

時代がくだって、中世に入り、鎌倉時代の初頭へさしかかると、
唇音退化の風潮（これは前々からあって、ハ行音を p から f へや
わらげてきた）が、wa, wi, u, we, wo を襲ってその w を落ち
させる。たまたまア列だけは、大きくくちびるを開く反動が働いて
w がはっきり残るが、他は異変を起す。その結果、語中・語尾のひ
ふへほとア行のいうえおと、ワ行のゐうゑをとがみな同音に帰して
しまう。

同音のかながそのように増加するから、鎌倉初頭の巨匠、藤原定
家でも、この3行に関するかぎり、あたかも前代の源順が混迷に陥
った轍^{てつ}をそのまま踏んで——言語の変遷には時代の大家でもそんな

微力なもので——自分の歌集、拾遺愚草の草稿でも、同じ語を、前と後とでまちまちに書いていた。清書を頼まれたしゅうとの源親行^{ちかゆき}がそれを注意して、この際、書き方を語によって一定されるがよろしかろうと建言する。定家は、それを認めて原案を親行に出させて合点したものだ^{づかい}と伝える「仮名文字遣」(行阿^{ぎょうあ}が増補したから「行阿仮名遣」とも)がある。

もっとも、この本の序文には、定家は、全部を賛成したように書いてあるが、世に、「下官抄」^{げかん}というものがあって、このほうが定家のものだといわれるし、行阿の増補以前のもと思われる「定家仮名遣」というものも世にあって、どちらもいたって簡単なものである。それでいて以上全部に共通なことは、「置く」が「をく」で、「岑の上」は「おのへ」とちがっていること、「をのこ」は「を」で正しいが、「男」は「おとこ」とあること、「故」が「ゆへ」、「行くへ」が「ゆくゑ」であること等々が共通である。そのせいか、中世の本は、堂々たる大著述もよくこう書いているものである。

さて、「行阿仮名遣」も、普通「定家卿仮名遣」として世に行われているのであるが、その編集ぶりを見ると、「下官抄」も、前述の「定家仮名遣」も「を」「お」、「え」「へ」「ゑ」、「い」「ゐ」「ひ」の8(あるいは「ほ」を加えて9)字のかなづかいであるのに、「わ」「は」、「む」「ろ」「ふ」を加えて14字のかなづかいである。目録には巻末に、「一定家卿口伝、二人丸秘抄」とあって、本文にはない。この「定家卿口伝」というのが、さきに言ったごく簡単な「定家仮名遣」というものにあたり、

(福井博士「国語学大系第九」)、「人丸秘抄」というものも、ほぼ同じのものであって、やはり簡単な8, 9字だけのかなづかいにすぎない。行阿の増補の部分がそれでだいたいわかるのであるが、語数の増加ばかりでなく、驚いたことには、今まであげた諸本に見えてない新意見の加わっていることである。

| | | |
|---------|----------------------|---------------|
| をそれ | おそるの 時はお也 | |
| きをひむま競馬 | きおふの 時はお也 | |
| をやこ | おやの時 は お也 | |
| こをけ | 小桶 只をけの 時はお也 | |
| 曉をき | おき別の 時はお也 | |
| 露おもみ | おもきの時もお也 をもしの時をは也 | |
| 花をおる | 花をたをる の時をは也 | |
| おけ 桶 | こをけの時 は をなり | |
| きおふ | きをひ馬の 時をは也 競 | |
| おもむく | おもむきの 時をは也 | |
| おととひ | をととの 弟をは也 | 兄弟 おとと ととも |
| さえのかみ | さいの神共 さゑのかみ共 | 道祖神 |
| さゑのかみ | さいとも さゑとも | 道祖神 |

こういう、先人の書にも、古典にもかつて聞いたことのない独断の

加わっていることである。これを、アクセントによって語を書き分けようとすると言って、仙源抄の^{ほつ}跋文で、長慶院がすでに非難される。

「中^{ころ}頃定家卿さだめたるとかいひて^{かの}彼家説を受くともがら、従ひ用るやうなり、おほよそ漢字には四声をわかちて、同文字も音にしたがひて心もかはれば、子細に及ばず。和字は文字一に心なし。文字あつまりて心をあらはすものなり……」

すなわち、邦語は、アクセントによってかなを替えて書く理由がないと論じておられる。そのよしあしは、ともかくとして、もしも定家にしろ、行阿にしろ、アクセントによってかなを替えて書く（この事を、大野晋氏がいちいち証をあげて、国語学会で証明されたそうである）としたら、どういうことを意味せねばならぬか。

これは、古典かなづかいを明らかにしようとすることとはまったく無関係で、実行かなづかいの企てであるから見なければならぬ。すなわち、これからどの語はどう書き、どう書き分けて行こうかという問題だったことである。ちょうど、今、政府が断行した、現代かなづかいと同種の「時代の口に合わせて」決めた当時の新かなづかい案である。政府とちがうところは、政府は、官報に発表して、みな、これについてくることを望んだのであるのに、定家卿や行阿は、他流には秘して、ただ自分たちの学派だけで、こう書いて、押し通して行こうという点だけである。

今まで、ほとんどすべての国語学史家は、この事を見落しているようである。

日本に生じた最初の「仮名文字遣」は、実行かなづかいだったので、後の世のかなづかいが、古典を読むために必要な知識としてのかなづかいだったのとは、かなづかいの名は同じでも、意義・目的はまったくちがうものであった。最初のかなづかいはむしろ現代かなづかいの一前例だったことをはっきりと認識しなければならない。

中世から以後の本が、「お」をとらうとして「を」と書き、「置く」を「をく」、「於て」を「をいて」、また「行く方」を「ゆくゑ」、故を「ゆへ」など書いていた。これは古代にはなかったことであり、中世文献の一特徴である。

江戸時代になっても、契沖^{けいちゆう}が出るまでの学者文人みなそうであった。一代のせき学林羅山^{らざん}の古典「つれづれ草」の註釈たる「野植^{のち}」などでもそうであり、芭蕉^{はしやう}の奥の細道などでもそうである。一概に誤りと見る前に、与えられた中世の事実として受け取らなければならない。

中世音韻図

拗音は省略した。

| | | | | | | | |
|---|----------|-------|-------|-------|-------|-------|-------------------------|
| ア | 行 | あ a | い i | う u | え ye | お wo | |
| カ | 行 | か ka | き ki | く ku | け ke | こ ko | |
| ガ | 語頭 | が ga | ぎ gi | ぐ gu | げ ge | ご go | |
| 行 | 語中 語尾 | が ɣga | ぎ ɣgi | ぐ ɣgu | げ ɣge | ご ɣgo | 末には ɣ と g とに 分化した |

| | | | | | | |
|----|------|-------|--------|--------|-------|-------|
| サ行 | さ sa | し ji | す su | せ se | そ so | |
| ザ行 | ざ za | じ zi | ず zu | ぜ ze | ぞ zo | |
| タ行 | た ta | ち tji | つ tsu | て te | と to | |
| ダ行 | 語頭 | だ da | ぢ dzi | づ dzu | で de | ど do |
| | 語中語尾 | だ nda | ぢ ndzi | づ ndzu | で nde | ど ndo |
| ナ行 | な na | に ni | ぬ nu | ね ne | の no | |
| ハ行 | 語頭 | は fa | ひ fi | ふ fu | へ fe | ほ fo |
| | 語中語尾 | は wa | ひ i | ふ u | へ ye | ほ wo |
| バ行 | 語頭 | ば ba | び bi | ぶ bu | べ be | ぼ bo |
| | 語中語尾 | ば mba | び mbi | ぶ mbu | べ mbe | ぼ mbo |
| パ行 | ぱ pa | ぴ pi | ぷ pu | ぺ pe | ぽ po | |
| マ行 | ま ma | み mi | む mu | め me | も mo | |
| ヤ行 | や ya | | ゆ yu | | よ yo | |
| ラ行 | ら ra | り ri | る ru | れ re | ろ ro | |
| ワ行 | わ wa | ゐ i | | ゑ ye | を wo | |

末には語頭と同音に帰した

末には語頭と同音に帰した

近代国語と古典かなづかいの発見

中世の末から、近世の初頭すなわち江戸時代の初めにかけて、ま

た大きな音韻変化が起った。これは、われわれに「昔のことば」と「今のことば」とをわかつしめる「国語史上の大きな音韻変化」である。それは、どういう変化であったか。

もともと母音二つを連ねて発音することのなかった日本語に、漢字音の影響で古典時代から au, ou, eu, ai, ei と母音の重なるものができて、中世末期までできたが、ついにもとの本性がやっぱり出てきて、これらの重母式連音を、それぞれ一単母音にしてしまった変化であった。

すなわち——

第一 ou—oo—ô の変化。

公工侯候口後等のこう (kou) をコー (kô) に。

共恭恐兇の類のきょう (kyou) をキョー (kyô) に。

曾僧層宋宗奏送の類のそう (sou) をソー (sô) に。

松鐘鍾頌訟の類のしょう (sou) をショー (shô) に。

登・等・藤・東・筒の類のとう (tou) をトー (tô) に。

重・寵・徴・澄の類のちょう (tsou) をチャョー (tsô) に。

したがって、純国語にも、次のような -ou の音があったのがこの時代にいっしょにみな oo すなわち ô になった。

こふ(乞ふ・恋ふ)の発音の kofu (平安中期以前) から ko-u (同末期以後) になって鎌倉・室町を過ぎ江戸期にはいってコー (kô) に、とふ(問ふ・訪ふ)の発音の to-fu (平安中期以前) から to-u となっていたのが、この期からトー (tô) に、

思ふが, omo-fu—omo-u—omô に,

い^い厭^いふが ito-fu—ito-u—itô に等々,

第二 au—oo—ô の変化。これは a と u とが互に^{けん}牽引して, a も o になり, u も o になった変化。すなわち,

央・桜・欧・謳のあう (au) がオー (ô) に,

孝・行・高・校の類のかう (kau) が, コー (kô) に

京・橋・郷・敬の類のきょう (kyau) がキョー (kyô) に

草・雙・相・想の類のさう (sau) がソー (sô) に

章・將・商の類のしょう (sau) がショウ (jô) に等々。

したがって, 純国語の次のような -au の音がまたこの時代にみな -oo すなわち ô になった。

あふ (合ふ・逢ふ) の発音の a-fu (平安中期以前) から a-u (平安末期以後) になっていたのが, 江戸期にはいってオー (oo—ô) に

かふ (買^かふ・飼^かふ・交^かふの類) の発音の ka-fu (平安中期以前) だったのが ka-u (平安末期以後, 鎌倉・室町を通じて) から, koo—kô に

同様に舞ふ・慕ふ・祝ふ・笑ふ・願ふ・ささふ・ねらふの類の -au も ô になって, これらがモー・シトー・イオー・ワロー・ネゴーとなった。

第三 eu (実は yeu) が yoo—yô となった変化。これも, e が u のほうへ, u が e のほうへ, 互に牽引して, どちらも o にあゆみ寄

って、oo すなわち ô になった変化。

幼・拗・妖の類のえう (yeu) がヨー (yô) に

教・喬・橋の類のけう (keu) がキョー (kyô) に

協・狭・俠の類のけふ (kefu) がキョー (kyeu—kyoo—kyô)

葉の e-fu (平安中期以前) から、e-u (平安末期から鎌倉・室町へかけて) だったのが、この期にまた yô に。

したがって純国語の酔^ゑふ (we-fu 平安中期以前) から eu むしろ yeu (平安末期から鎌倉・室町へかけて) だったのが、この期にはいつて、yoo—yô になった。けふ ke-fu (平安中期以前) から ke-u (平安末期から、鎌倉・室町へかけて) だったのが、この期にはいつて kyoo—kyô になった。

サ行のせう (せむの音便形) が、seu から syô となったのもこの期からである。ませう—マシヨ—, どうせう—ドーシヨ—等々。

以上のいわゆるオ列長音のあらわれは、二重母音式連音を中世400年かかって、こなししてしまい、もともと日本人の口に合うようにしてしまった音変化であるから、同じ条件のあらゆる面に向かって一様に起った大きな変化である。

だが、これによって、同音になったものの数が幾層倍して、どう書き分けてよいか、漢字音のほうは、漢字で書けば、かなづかいは知らなくても通るが、純国語は、かなで書かなければならない。そのため、知らず知らず口に合わせて書いたり、類推でやってのけたりしていた。

時代は、世が治まって学問が起り、その中から、契沖が古学に志して、古文献に目をさらすこと深くなるにつれて中世伝統のいわゆる「定家卿仮名遣」が、古典のかなづかいとは合致しないことを見て取り、つぶさに古典に典拠を求めて、古代のかなづかいは、かくかくであったということを五巻に書きあげたのが有名な「倭字正濫鈔」^{わじしよらん}であった。

契沖が、多年のうんちくを傾けて、こうして古典かなづかいを明らかにしてくれたのでこれをきっかけに、古学が江戸期に起ったのである。この知識なしには、まったく読めなかった古典が、これによってはじめて読めるようになったからだった。それゆえ、わが国学というものの存するかぎり、契沖の功績は、不朽であり、「倭字正濫鈔」はとこしえに記念される画期的な名著と言って過言ではない。ただし、これは、あくまでも古典かなづかい発見という点においてである。

契沖は、古典が書かれているかなづかいはこうだということを発見したが、古典時代を去ること 500年、日常のことばは、それから二重に発音の大変化を経てきている事実にかんがみれば、日常の言語生活における実行かなづかいは、どうすべきか、この問題は、また一つ考えて見てよい新しい問題だったはずだが、契沖はそれをどう考えたか。

- 一 古典の書かれているかなづかい
- 一 日常の言語生活に民衆の毎日使うかなづかい

契沖は、この二つを、二つとして考えることなしに、古典がこうだから、日常の毎日の用にも、一語一語、そのとおりに書くのが当然だと思い込み、そうひとりぎめしていたようなのである。だから、いわゆる「定家卿仮名遣」は、古典と合わないという点だけを強調して、それが実行かなづかいで、自分の発見した古典かなづかいと性質のちがうものだという事に思い至らなかつたのはぜひもない。

ところが契沖の発見によって勃興^{ぼつ}した国学の諸先達も、契沖の態度をそのまま継承したこと、好むところに知らず知らずとらわれていた誤り、ぬぐいがたいことである。

「倭字正鑑抄」に、誤りがあるとすれば、ことばの歴史観を欠いて、いわゆる「定家仮名遣」の意義を認識しなかつたことである。だから、正濫抄の出たときに、すぐに「倭字通例全書」を書いて契沖を誤りよばわりした橋成員という人が現れた。契沖の「日本紀をはじめとする六国史以下、およそかなづかいの証とすべきものはみなこれを参照したということばをおうむ返しにして、古書のままでよいとしたら「かなづかひは無きなり」と駁^{はく}している。なるほど、实用かなづかいの立場からすれば、ただ古書どおりでよいのだったら何も問題なしに済む。ただ古書に従いさえすればよいから。古代と、発音のずれがあり、歴史がそこに大きく起っているから、古書をはなれて、古書は古書、今は今としてのかなづかいをわれわれは実行しているのだというのであって、一応道理なのであるが、この道理を従来国語学史家にひとりもくんでやる人がなく、橋成員は、とんでもない

世迷い言を言って、輝かしい契沖の名著にどろをぬると指弾しているようである。

契沖その人も成員の言うところに少しも耳を貸さず、ただよこしまな説を成すものとして、「倭字正濫通妨抄」を書いているが、やはり自分の発見に執して、国語の歴史的事実に全然目をふさいでいるのは惜しまれる。理屈なしに、狂歌をもって漫罵ばを加えているところは、どこかに狭量な町学潜気質の一面を思わせる。

これに比較すると、高い識見、広い理解、まったく時流を抜いてわれわれを驚倒させる人が田安宗武ひねたけであった。

田安宗武という人が偉大な国学者であったことは、土岐善麿博士によって明らかにされたが、その「玉函叢説」の一節（土岐善麿田安宗武第三冊，21ページ，22ページ）に、

「それ仮字は、ことばを聞くがままに仮字書にして、また仮字書のままに読むぞ本なる。（中略）

げにいふがままに書かずば、何をもて転語を伝へんや。

粟を^あはと書けるも、古くは^あわといはで、^あはといひたる故也。今横にかよひて^あわといふをも本語の仮字なりとて猶^あはと書く類たぐひは、古意にかなはず。（中略）

^あわといふを^あわと書ける類ひを笑ふまじきなり。」

この終りの一行、明らかに現代新かなづかひの肯定論者である。

^あわと言うようになってからも^あはと書く類は「古意にかなはず」と喝破かつした卓見、ことに「げにいふがままに書かずば何をもて転語

を伝へんや」——言語の歴史観をはっきりにぎっている人だったようである。

賀茂真淵翁を^{へい}聘して国学をたずねていたことそのことすでに大名として、えらい事であるが、土岐博士によればひとりの歌人としても、ひとりの学者としてもたいした人だった。真淵翁の歌が万葉振りになったのは途中からで、初めは古今調だった。真淵よりさきに宗武がすでに万葉調の歌をよんでいたので、むしろその影響だったということであるし、古事記の註については、真淵翁は、もう自分は年を取ってできないからと宣長にすすめたのであるが、宣長の古事記伝 40 巻の出る前、宗武にすでに古事記全巻の訓読ができていた。

宗武の国学は、まったくその天才に負うところのもので、格別だれの系統というものに拘束されなかったからであろう——あらゆる^{あらかたい} 県居門^{すず}や鈴^やの屋門下の意見に飛びはなれて、ひとり新かなづかいの肯定論をはいているわけである。真淵翁が、なぜここまで目を開いてこられなかったか。しかし、真淵翁門下には伝わり、加藤美樹^{うまさき}とその弟子の上田秋成が、宗武の意見を尊重して、「或御説」「或御説」と言って、引用しているのは注意を引く。

すなわち、秋成の「靈語通」があったゆえんであるが、宣長著の「^か呵^{かい}刈^{かい}葭^か」の一喝^{かつ}に会って、ついに「或御説」も民間国学の間に芽を出さずにしまうのである。

ただし、徳川氏 300 年の間に、今ひとり、言語史観に目を止めた学者がある。^{はなわほま} 塙保巳^{いち}—その人である。そのことは、門人の石原正明

近代語音韻図

*このほかにヤ行拗音はア・ヤ・ワの3行を除いて全部にア列・ウ列・オ列の3段ずつ。ワ行拗音は、くわ・ぐわの2音だけ。

| | | | | | | |
|----|------|-------|-------|-------|------|------|
| ア行 | あ a | い i | う u | え e | お o | |
| カ行 | か ka | き ki | く ku | け ke | こ ko | |
| ガ行 | 語頭 | が ga | ぎ gi | ぐ gu | げ ge | ご go |
| | 語中語尾 | が ɣa | ぎ ɣi | ぐ ɣu | げ ɣe | ご ɣo |
| サ行 | さ sa | し si | す su | せ se | そ so | |
| ザ行 | ざ za | じ zi | ず zu | ぜ ze | ぞ zo | |
| タ行 | た ta | ち tʃi | つ tsu | て te | と to | |
| ダ行 | 語頭 | だ da | ぢ dʒi | づ dzu | で de | ど do |
| | 語中語尾 | だ da | ぢ dʒi | づ dzu | で de | ど do |
| ナ行 | な na | に ni | ぬ nu | ね ne | の no | |
| ハ行 | 語頭 | は ha | ひ hi | ふ fu | へ he | ほ ho |
| | 語中語尾 | は wa | ひ i | ふ u | へ e | ほ o |
| バ行 | 語頭 | ば ba | び bi | ぶ bu | べ be | ぼ bo |
| | 語中語尾 | ば ba | び bi | ぶ bu | べ be | ぼ bo |
| パ行 | ぱ pa | ぴ pi | ぷ pu | ぺ pe | ぽ po | |
| マ行 | ま ma | み mi | む mu | め me | も mo | |

分化しはじめた。

ここは同音に帰つた。

ここは同音に帰した。

| | | | | | |
|----|------|------|------|------|------|
| ヤ行 | や ya | | ゆ yu | | よ yo |
| ラ行 | ら ra | り ri | る ru | れ re | ろ ro |
| ワ行 | わ wa | ゐ i | | ゑ e | を o |

の「年々随筆」の次のような語でよくわかる。

「いゐ、えゑ、おをは、^{すで}既にまぎれ果(て)ての後、さる名家の
しいで給ひける事の跡なるに、やごとなきあたり、みな用ひさ
せ給ふ事なれば、今これにしたがはむに、^{だれ}誰かは、まどへり、あ
やまれりといはん。かなづかひの事定まれるが如し。

近き頃契沖云々ここにおいて、かなづかひ世に二流いできたり。

そのかみ、いゐ等の音わかれたりし世の古言をとくには、^{この}此か
なづかひによらざればおもひえがたし。たとへば、今がな、おとこ、
おとめと書(く)なれど、少男少女の義なれば、古がな、をと
こ、をとめなり。かかれば、学問に志ある人此かなも又廢しがた
し。

わが先生は、延喜より上たる書は古がなに、後なる書は、今が
なに、二様に書(き)て物せらる。此ごろより、いゐ等の音まが
ひてひとつになりし事なれば、此処分や公平ならん云々」

これによるに、石原正明は「古がな」・「今がな」と言って二様のか
なづかひを認め、古がなは古典を読むに欠くべからざる知識、今が
なは定家の定めたのがあるからそれに従って書いてよかろうと、当
用の実行かなづかひを別に認めているようである。そして、平安末

期から以後のは塙先生はいちいち古典かなづかいにあえて統一せず
に、そのままにして置かれたゆえんをめぐりょうにしている。これ
は塙先生のすぐれた識見である。そうせずに、みな古典かなづかい
に改めて、「群書類従」を編集されたら、中世の日本語の事情が埋没
して隠れてしまったことであろう。さいわいにもそのままに刊行さ
れたから、それによって中世の事情がそのままわれわれにたどられ
る。宗武のいわゆる、「転語」が明らかに伝えられたのである。

惜しいかな、こういう国語史の見解が、梶居門・鈴屋門系統の人
々に欠如したために、その手になる江戸期の日本辞書に、一つも国
語史の見方を取り入れた編集がなかった——その後の明治の「語彙」
も「言海」も「日本大辞林」以下までも、日本には、ひとりのサム
エル＝ジョンソンもいなかったことがさびしい。ジョンソンの英語
辞典の近代英語のあのつづりが、今日の英語のつづりを決定してく
れた。日本では契沖が 1000 年前の古典のかなづかいを発見してく
れて以来、だれもだれも 1000 年前の古典かなづかいのみを永久不
変の唯一無二のほんとうのかなづかいと思い込んで、江戸時代でも
明治時代でも 1000 年前のかなづかいで書いて、それを当然として
いたのである。最近の音引き辞典が出るまで。